学生の学習動機づけに影響を及ぼす要因

——進路決定時の親の関わりと進路自己決定性——

Students' Motivation in Learning: The Effects of Parents' Involvement and Students' Self-determination during the Period of Career Decision Making

中野 良哉¹⁾

YOSHIYA NAKANO¹⁾

¹⁾ Department of Physical Therapy, Kochi Rehabilitation Institute: 1139-3 Takaoka-cho, Otsu, Tosa-shi, Kochi 781-1102, Japan.
TEL+81 88-850-2311

Rigakuryoho Kagaku 28(4): 551-556, 2013. Submitted Feb. 18, 2013. Accepted Apr. 2, 2013.

ABSTRACT: [Purpose] In this study we examined the relationship among physical therapy students' motivation in learning, parents' involvement during the period of career decision making and students' self-determination in course selection. [Subjects] The subjects were one hundred seventy-seven physical therapy students. [Method] We performed a survey of the students using the motivation style scale, self-determined course selection scale and scales of communication with parents about their career decision making. [Results] The main results were as follows. Students' motivation in learning significantly correlated with self-determination in the course selection. Supportive types and mutual-negotiation types had significantly higher self-determination in the course selection and identified regulation than parent-led types. [Conclusion] We conclude that parents' involvement such as encouraging and making clear difference of opinion during the period of career decision making, influence their children's higher self-determination in career decision making and motivation in learning.

Key words: motivation, career decision making, parent-child relationship

要旨:〔目的〕学習動機づけと進路選択時の進路自己決定性、学生の進路決定への父母の関わり方との関連を検討した。〔対象〕理学療法学科学生（137名）を対象とした。〔方法〕質問紙法にて学習動機づけと進路自己決定性、進路決定時の親の関わり方を評価し、それぞれの関係について分析を行った。〔結果〕学習動機づけと進路自己決定性との間に有意な相関が示された。進路決定時の親の関わり方として、応援・相互交渉型は親主導型よりも学生の進路自己決定性が高く、同一化動機づけが有意に高い結果となった。〔結語〕進路決定の際に、親が学生を励ましつつ、考えの違いを明確にする関わりをもつことが、学生の進路自己決定性、自律的な動機づけの高さと関係することが示された。
キーワード: 動機づけ、進路決定、親子関係

¹⁾ 高知リハビリテーション学院 理学療法学科:高知県土佐市高岡町乙1139-3 (〒781-1102) TEL 088-850-2311

I. はじめに

理学療法士の専門知識や技術を習得していくためには、学生自ら学ぶ姿勢が不可欠である^{1,2)}。その一方で、自分の決定によらず、親の強い勧めにより進学したものの、本人にとっては不本意な進学であり、養成校での学習動機づけが低い学生が見受けられる。これまで、理学療法学科学生を対象とした学習動機づけに関する研究では、学業成績との関連³⁻⁵⁾や授業形式との関連⁶⁾について検討がなされてきた。しかし、先に述べた進路決定や親子関係のあり方の観点から養成校での学習動機づけを検討した研究は少ない。動機づけのモデルの一つに自己決定理論⁷⁾がある。これは自己決定の程度によって、内発的動機づけと外発的動機づけを連続的に捉える考え方である。自己決定理論では、重要な他者の存在や他者との関係性によって外発的な動機づけが自律的な動機づけへと変化すると仮定している⁷⁾。これを学生が進路選択を行い、職業的自立に向けて必要な能力を発達させていく過程にあてはめると、第一に学生が進路決定時にどの程度自己決定を行ったかが、入学後の学習動機づけに影響を及ぼすことが考えられる。小・中・高校生を対象に行われた調査⁸⁾では、子どもの自己決定の発達、学習意欲の発達に関係することが示されており、同様の関係が専門職養成課程進学の際の進路自己決定の程度と入学後の学習動機づけとの間にもみられることが予想される。第二に、進路を選択する際に重要な他者である養育者からどの程度自己決定を促すような支援がなされていたかが、進路の自己決定性や養成校での学習動機づけに影響を及ぼす可能性が考えられる。青年期の親子間の相互作用の特徴として、Cooperら⁹⁾は結合性と独自性をあげており、質問紙を用いた高橋の調査^{10,11)}では青年の進路選択時においてもこれらの相互作用の特徴が示されている。結合性とは、他者の考えや感情を尊重し、発展させるためにそれらを認め、励ましを与えることであり、独自性とは、自分の視点をはっきり伝える、自他の意見の相違を述べることであり⁹⁾。青年が自律性を発揮するためには、他者から区別された自分の立場を明確にし、それが肯定的に支持される環境、すなわち独自性と結合性がともに表出されることが望ましいと考えられる。これまでの研究では、親の示す結合性と独自性は職業選択への積極的な取り組みやアイデンティティとの関連^{10,11)}が示されているが、理学療法士養成課程に在籍する学生の学習動機づけや進路自己決定性との関連については十分明らかになっていない。また、学生の学習を支援する環境を整備するためには、学校だけでなく家庭の要因もふまえて青年期の学生の動機づけの内在化、自律化のプロセスについて検討する必要がある。そこで本研究では、進路決定時の養育者と学習者の関係性によって養成課程での学習動機づけの内在化がどのように異なるかを明らかにする

ことを目的とし、理学療法士を目指す学生を対象に、養成課程での学習動機づけと進路自己決定性、学生が認識した進路決定時の親の関わりとの関係について検討を行った。

II. 対象と方法

対象学生は、A県内の4年制医療系専門学校に在学中の理学療法学科1、2年生137名(男性83名、女性54名、平均年齢 18.76 ± 1.04 歳)とした。このうち、年齢の高い28歳の学生1名は除外し、解析の対象者は、136名(男性82名、女性54名、平均年齢 18.69 ± 0.67 歳、年齢範囲18歳-21歳)とした。

対象者ごとに、以下に示す心理尺度を質問紙法により実施した。

学生の学習動機づけの測定には、岡田ら¹²⁾の大学生用動機づけ尺度34項目を用いた。特定の教科ではなく、学ぶプロセスに共通する動機づけを測定するものである。回答は「あてはまらない」から「あてはまる」までの5段階で求めた。この尺度の得点が高いほど、動機づけが高いことを示す。

進路選択における親の関わり方の測定には、進路選択における親子間コミュニケーション尺度¹⁰⁾から、独自性に関する項目6項目(項目例:父(母)親は私の進路について意見を言うときに、その理由をはっきりと言った。父(母)親は、進路について「どうしてそうしたいの」と私に理由を聞いた)、結合性に関する項目3項目(項目例:父(母)親は最終的に私が決めた進路を応援してくれた)を用いた。「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の6段階で、父親と母親について進路決定時を振り返って学生に評定を求めた。この尺度の得点が高いほど、結合性・独自性が高いことを示す。

進路の自己決定性の測定には、本多ら¹³⁾の進路決定プロセス尺度より、進路決定の主体性に関する下位項目から「自分で納得した上で決定した」「いろいろ考えて、最終的に自分の判断で決定した」「自分の意志で決定した」の3項目を用いた。それぞれ「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」の6段階で回答を求めた。この尺度の得点が高いほど、進路選択時の自己決定性が高いことを示す。

3つの尺度を含む質問紙をそれぞれの学年ごとに授業終了後に一斉に配布し、その場で回収した。調査時期はいずれの学年も7月中旬であった。統計処理は、動機づけ尺度の検討には最小二乗法による因子分析(プロマックス回転)を用いた。尺度の信頼性指標の一つである内的整合性を確認するために、Cronbachの α 係数を算出した。動機づけ尺度と進路自己決定尺度との関係にはピアソンの相関係数を求めた。動機づけ尺度と進路選択における親子間コミュニケーション尺度、進路自己決定に

関する尺度との関係については、一元配置分散分析を用い、その後の多重比較にはBonferroniの方法を用いた。なお、有意水準は5%未満とした。

倫理的配慮としては、対象者に研究の主旨・方法、対象者のプライバシーの保護、得られたデータは研究以外の目的では使用せず、調査結果が成績に影響しないことを口頭、文書にて説明し、署名による同意を得た上で行った。個人情報扱いには十分留意した。

III. 結 果

学習動機づけ尺度34項目に対して因子分析を行なった。因子負荷量が0.40に満たない7項目を削除し、27項目に対して再度因子分析を行なった結果、5因子を抽出した(表1)。

岡田ら¹²⁾の尺度構成に従い、第一因子を「内発」、第二因子を「同一化」、第三因子を「外発」とした。動機づけの概念的定義では「取り入れ」とされていた項目が、本研究では、第四因子と第五因子の2つの異なる因子に高い負荷量を示した。第四因子は「しなければならないようになってきているから」、第五因子は「まわりの人により印象を与えたいから」などの表現で示されている項目からなり、岡田らの「取り入れ」に関する指摘¹²⁾を参考に、第四因子を「取り入れ(統制の内在化)」、第五因子を「取り入れ(自我関与)」とした。尺度の信頼性を検討するために α 係数を算出した。その結果、第一因子 $\alpha=0.94$ 、第二因子 $\alpha=0.88$ 、第三因子 $\alpha=0.88$ 、第四因子 $\alpha=0.80$ 、第五因子 $\alpha=0.79$ となり内的整合性が確認された。次に、進路選択における親子間コミュニケーション尺度、

表1 動機づけ尺度の因子分析結果

	I	II	III	IV	V	共通性
・その内容が知りたいから。	0.87	-0.18	-0.07	0.07	-0.03	0.70
・おもしろいから。	0.82	-0.12	-0.06	0.09	-0.02	0.65
・自分がそうしたいと思うから。	0.80	0.15	-0.07	0.02	-0.08	0.67
・難しい内容を学ぶのが楽しいから。	0.78	-0.10	0.02	-0.04	0.18	0.71
・考えたり、頭を使ったりするのが好きだから。	0.77	-0.13	0.02	-0.25	0.26	0.69
・知識を得ることで幸せになれるから。	0.76	0.08	-0.07	0.05	0.01	0.64
・知識や能力が身につくのが楽しいから。	0.76	0.14	0.00	-0.12	-0.07	0.56
・好奇心が満たされるから。	0.73	0.08	0.09	-0.05	-0.01	0.57
・内容を理解できるようになるのがうれしいから。	0.71	0.22	0.24	0.03	-0.23	0.62
・教材や本などが面白いから。	0.67	-0.19	-0.05	0.20	0.10	0.58
・わからないことがわかるようになると自信がつくから。	0.65	0.24	-0.06	-0.06	-0.05	0.51
・将来の成功に結びつくから。	-0.05	0.86	-0.03	0.07	0.15	0.80
・将来いろいろなことに役立つから。	-0.02	0.84	-0.06	0.00	0.14	0.73
・就職試験や職業にとって必要だから。	-0.02	0.81	0.05	-0.05	-0.08	0.63
・そうすること自体が大切なことだから。	0.18	0.67	0.00	0.03	-0.01	0.55
・しないとまわりの人が文句を言うから。	0.04	-0.01	0.92	0.01	-0.01	0.87
・まわりからやれと言われるから。	0.01	-0.03	0.91	0.03	0.00	0.86
・親がうるさいから。	-0.03	-0.04	0.80	-0.06	-0.01	0.59
・やらされているから。	-0.21	0.07	0.45	0.13	0.29	0.45
・しなければならないようになってきているから。	0.03	-0.03	0.04	0.87	-0.09	0.72
・きまりのようなものだから。	-0.04	-0.05	0.02	0.67	0.02	0.44
・今の社会ではしなければならないようになってきているから。	0.00	-0.04	0.05	0.65	0.14	0.55
・課題などのやらなければならないものを与えられるから。	-0.18	0.20	-0.11	0.64	-0.10	0.39
・しないと罪悪感を感じるから。	0.25	0.03	0.04	0.53	-0.08	0.43
・まわりの人により印象を与えたいから。	0.00	0.14	0.03	-0.02	0.86	0.77
・まわりの人に能力を示したいから。	0.03	0.01	0.04	-0.08	0.70	0.48
・それを通して自分の価値が感じられるから。	0.20	0.03	0.00	0.33	0.41	0.58
因子寄与	7.63	3.73	4.07	4.74	4.25	
因子間相関						
II	0.27					
III	0.21	-0.09				
IV	0.33	0.30	0.48			
V	0.42	0.06	0.48	0.46		

進路自己決定性尺度について α 係数を算出した。その結果、結合性が父親 $\alpha=0.82$ 、母親 $\alpha=0.85$ 、独自性が父親 $\alpha=0.78$ 、母親 $\alpha=0.73$ 、進路自己決定性は $\alpha=0.78$ であった。各尺度得点の平均値、標準偏差、 α 係数を表2に示す。動機づけと進路自己決定性との相関を求めたところ、進路自己決定性と「内発」($r=0.17$, $p<0.05$)、「同一化」($r=0.36$, $p<0.01$)との間にそれぞれ有意な正の相関が認められた(表3)。

進路決定時の親の関わりについて、平均値をもとに結合性の高低と独自性の高低の組み合わせから先行研究^{10,11)}を参考に4つのタイプに分類した。結合性・独自性ともに低い不明確型、結合性が低く独自性が高い親主導、結合性が高く独自性が低い応援型、結合性・独自性ともに高い相互交渉型である。これらの分類に基づき、タイプ間で学習動機づけや進路自己決定性に差がみられるのか分散分析を行った。「同一化」は母親の不明確型と応援型($p<0.05$)、不明確型と相互交渉型($p<0.01$)との間に有意差が認められ、いずれも不明確型が有意に低い結果が示された。また、母親の親主導型と応援型($p<0.05$)、親主導型と相互交渉型($p<0.01$)との間に有意差が認められ、親主導型が有意に低い結果が示された。「外発」は父親、母親いずれにおいても親主導型が応援型よりも有意に高い結果(父親 $p<0.05$; 母親 $p<0.01$)が示された。「取り入れ(自我関与)」は母親の相互交渉型が応援型よりも有意に高い結果($p<0.01$)が示された。進路自己決定性は母親の親主導型と応援型($p<0.05$)、

親主導型と相互交渉型($p<0.01$)との間に有意差が認められ、親主導型が有意に低い結果が示された。「内発」と「取り入れ(統制の内在化)」については父母どちらにおいても有意な差は認められなかった(表4, 5)。

IV. 考 察

本研究では、専門職養成課程における学習動機づけと進路決定時の親の関わり方、学生の進路自己決定性との関係について検討を行なった。

学習動機づけについて尺度を用い検討を行なった結果、5因子が抽出された。大学生を対象とした先行研究¹²⁾では、自律性の高い順に、活動それ自体に興味や楽しさを見出す「内発」、活動の価値を受け入れている状態である「同一化」、不安や恥を回避する消極的な理由に基づく「取り入れ」、報酬や罰、外的要求に基づく「外発」という4段階の順序性を仮定し、尺度の検討を行った結果4つの因子が抽出され、概念と一定の整合性が示された。理学療法士養成課程の学生を対象とした本研究では、動機づけの概念的定義において「取り入れ」とされていた項目が、2つの異なる因子として抽出された。特に就職のためにしなければならないという統制を認識した動機づけ(統制の内在化)と、専門職をめざし、まわりの人により印象を与えたいからといった他者からの評価を求める動機づけ(自我関与)である。養成課程での学習内容が将来の国家資格取得・就職や専門職に就くことと密接につながっており、他者からの評価基準も明確であるため、不安や恥を回避する「取り入れ」動機づけの構造が一般大学生とは異なったと考えられる。しかし、今回用いた項目内容と動機づけ概念との間に一部相違がある可能性も考えられるため、「取り入れ」については項目と概念間の関連について今後さらなる検討が必要である。「内発」、「同一化」、「外発」については、先行研究¹²⁾における一般大学生とほぼ同様の因子構造が認められ、動機づけ概念との間に一定の対応が見られた。それぞれの評定値をもとに動機づけの状態をみると、「同一化」と「取り入れ(統制の内在化)」の評定が比較的高いことがわかった。養成校に在籍する学生は、将来の専門的な職業に就くために必要だから、あるいは、そのためにしなければならないから学習するといった動機づけの側面が高い様子がうかがえる。

進路選択時の自己決定性と学習動機づけとの関連につ

表2 各尺度の記述統計量

	平均	標準偏差	α
動機づけ			
内発	2.92	0.75	0.94
同一化	4.01	0.71	0.88
取り入れ(自我関与)	2.81	0.75	0.79
取り入れ(統制の内在化)	3.42	0.71	0.80
外発	2.49	0.81	0.88
進路自己決定	4.98	0.95	0.78
進路への関わり方			
父親 結合性	4.48	1.01	0.82
父親 独自性	2.65	1.03	0.78
母親 結合性	4.74	0.96	0.85
母親 独自性	3.13	0.93	0.73

表3 動機づけと進路自己決定の相関係数

	内発	同一化	取り入れ (自我関与)	取り入れ (統制の内在化)	外発
進路自己決定	0.17 *	0.36 **	0.08	0.07	-0.10

* $p<0.05$, ** $p<0.01$.

表4 父親の関わり方と動機づけ、進路自己決定

	不明確型 (n=32)		親主導型 (n=27)		応援型 (n=27)		相互交渉型 (n=40)		F
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
内発	2.74	0.64	3.06	0.69	2.82	0.90	3.09	0.78	1.71
同一化	3.80	0.63	4.00	0.50	4.12	0.74	4.02	0.73	1.20
取り入れ(自我関与)	2.74	0.66	2.86	0.74	2.57	0.71	2.99	0.79	1.96
取り入れ(統制の内化)	3.29	0.64	3.63	0.70	3.19	0.94	3.58	0.54	2.80 *
外発	2.54	0.79	2.78	0.81	2.15	0.82	2.52	0.80	2.85 * 応援<親主導
進路自己決定	4.83	0.96	4.73	1.22	5.11	0.82	5.24	0.74	2.11

* $p<0.05$, ** $p<0.01$.

表5 母親の関わり方と動機づけ、進路自己決定

	不明確型 (n=24)		親主導型 (n=39)		応援型 (n=32)		相互交渉型 (n=39)		F
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
内発	2.81	0.51	2.97	0.70	2.86	0.89	3.05	0.78	0.59
同一化	3.72	0.47	3.74	0.65	4.18	0.77	4.25	0.50	7.11 ** 不明確<応援・相互交渉, 親主導<応援・相互交渉
取り入れ(自我関与)	2.69	0.55	2.91	0.65	2.48	0.76	3.06	0.83	4.32 ** 応援<相互交渉
取り入れ(統制の内化)	3.26	0.58	3.55	0.56	3.26	0.97	3.53	0.67	1.67
外発	2.64	0.79	2.78	0.61	2.19	0.84	2.42	0.88	3.76 * 応援<親主導
進路自己決定	4.73	0.89	4.61	1.02	5.27	0.79	5.29	0.90	5.28 ** 親主導<応援・相互交渉

* $p<0.05$, ** $p<0.01$.

いては、「内発」、「同一化」との間に有意な相関が認められ、進路選択時にどの程度自己決定したかが、入学後の学習動機づけと関係することが示された。比較的自律性の高い動機づけと進路自己決定性の関連が示されたことは、行動に対していかに自己決定性が高いかが適応状態と関連するという自己決定理論と合致する結果と考えられる。

学生の学習動機づけやそれに関係する進路選択時の自己決定性を高めるために、まわりの人々がどのように支援する必要があるのかを探る必要がある。そこで、学生の進路決定時の親の関わり方のタイプごとに学習動機づけ、進路自己決定性の比較を行った。学生の進路自己決定性は母親の親主導型の関わりよりも応援型、相互交渉型の関わりの方が高いことがわかった。学生の進路自己決定を促すためには、子どもの意見を尊重し、支持する関わりや、それに加えて親子の意見の相違をはっきり述べることで、子ども自身の意見を明確化する関わりが重要であることが示唆された。「同一化」動機づけについても、母親の親主導型、不明確型の関わりよりも応援型、相互交渉型の関わりの方が高いことが示された。意見の相違に対して応答的、受容的な関わりが、将来の専門的な職業に就くために必要だから学習するという価値の内化を促していることが考えられる。「取り入れ(自我

関与)」は母親の応援型よりも相互交渉型が高く、相互交渉型は結合性だけでなく独自性も高い関わり方であるため、学生が親の意見を意識し「まわりの人による印象を与えたいから」といった失敗に伴う恥を避け自らの価値を守る動機づけと関連を持つことが考えられる。「外発」は父母ともに親主導型が応援型より高い結果となった。親主導型は独自性のみが高いため、独自性を含まない応援型よりも学生が親にやられているという感覚を持つことにつながりやすいことが考えられる。

本研究では、養育者と学習者の関係性によって養成課程における学習動機づけの内化が異なることが示された。すなわち、親の関わり方として、親主導型よりも、応援・相互交渉型の学生の進路自己決定性、自律的動機づけが有意に高いことから、進路に関する家庭での話し合いにおいて親は、1つの意見を強制する、または放任するのではなく、進路について学生の自己決定を認め、励ます関わりとともに、意見の相違を明確にし、意見の相違が必ずしも否定的な側面を持つばかりではないとの認識を持たせることが、学生の自律性を促す上で重要であることがわかった。家庭での話し合いの在り方については、高等学校における進路指導や、養成課程入学後の保護者面談などを通して、必要に応じて助言等が必要となるだろう。その一方で、最も自律性が高い動機づけと

される「内発」動機づけは、進路自己決定性との関連は認められたが、親の関わり方との関連は認められず、本研究では関連する要因を特定できていない。親子関係以外の要因として、普段の学校生活の中での教師の関わり方や学生同士の学習活動のあり方が考えられる。今後の課題として、そうした要因もふまえて動機づけとの関連を検討する必要がある。

自己決定理論に基づく動機づけは、従来の内発・外発の二分法による動機づけの捉え方とは異なり、親や教師など周囲との関係性によって、自律性の低い動機づけから、自律性の高い動機づけへと変化すると仮定している。すなわち、学生は必ずしもはじめから内発的動機づけが高い段階から出発するのではなく、より自律性の高い動機づけへと移行する過程にあると考えられる。家庭で十分な支援が受けられていない学生に対しては、教員が学生の状況に合わせて授業を進行し自信を持たせることや、専門職を目指すことを励まし、課題や授業内容の一部を自己決定させるなどの自律性を促す支援が必要となるだろう。養成校での動機づけの継続的な変化を調査することによってそうした学校での支援が有効であるかについても今後明らかにする必要がある。

引用文献

- 1) 水池千尋, 大城昌平, 重森健太・他: 本学理学療法専攻1年次生の学習動機と職業意識. リハビリテーション科学ジャーナル, 2006, 1: 83-90.
- 2) 片岡紳一郎, 阿曾絵巳, 中野 禎・他: 理学療法士教育における情意領域に対する教育的アプローチ. 関西福祉科学大学紀要, 2010, 14: 187-201.
- 3) 敷地雄一, 宮本省三, 森岡 周・他: 理学療法学科学生の学習動機に関する研究 学習動機の形態及び学業成績との関連性. 理学療法科学, 1999, 26(4): 163-167.
- 4) 吉澤隆志, 太田信夫, 藤沢しげ子: 学習意欲が定期試験成績に及ぼす効果. 理学療法科学, 2008, 23(2): 249-253.
- 5) 吉澤隆志, 松永秀俊, 藤沢しげ子: 学習意欲が定期試験成績向上に及ぼす効果について. 理学療法科学, 2009, 24(3): 463-466.
- 6) 吉澤隆志, 松永秀俊, 藤沢しげ子: 授業形式の違いが学習意欲に及ぼす効果について. 理学療法科学, 2009, 24(3): 369-374.
- 7) Ryan RM, Deci EL: Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. Am Psychol, 2000, 55(1): 68-78.
- 8) 新井邦二郎: 自己決定の発達と学習意欲の発達との関係. 筑波大学心理学研究, 1998, 20: 99-105.
- 9) Grotevant HD, Cooper CR: Individuation in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence. Hum Dev, 1986, 29: 82-100.
- 10) 高橋 彩: 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連. パーソナリティ研究, 2008, 16(2): 159-170.
- 11) 高橋 彩: 女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連. パーソナリティ研究, 2009, 17(2): 208-219.
- 12) 岡田 涼, 中谷素之: 動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響: 自己決定理論の枠組みから. 教育心理学研究, 2006, 54(1): 1-11.
- 13) 本多陽子, 落合幸子: 医療系大学生の進路決定プロセス尺度作成の試み 進路決定プロセスの類型と職業的アイデンティティからの検討. 茨城県立医療大学紀要, 2006, 11: 45-54.